

第6章 まとめ

実習準備

2012年名古屋大学大学院日本語教育実習は、2/13（月）から3/1（木）にかけて計14日間行うこととなり、その実施に向けて1月より準備に入った。

初回の実習生会議では、本実習の基本理念の確認、チーム・ティーチングを行うメンバーおよび各担当日の確認、募集する学習者層の決定（募集対象クラスの決定）、各仕事の分担を行った。

実習実施

本コースでは、学習者の緊張を解くとともに、教師間の連携を見込んで、2/13（木）の初回授業をオリエンテーションとして設定し、自己紹介やゲームを行うなどして、明るい雰囲気づくりに努めた。しかしながら、「自分の求めていた内容とコース内容が合わない」などの理由から、参加を見送った学習者もいた。本実習において、学習者のニーズ分析に時間をとることができなかったことは、大きく悔やまれる点である。

しかし、その後、行った14日間の各授業では、1月の準備期間において設定したシラバス・デザイン（Can-Do statements）を前提として、各日とも、学習者の立場に立った、意義深い授業を行うことができた。限られた準備期間ではあったが、TA 4名の懇切丁寧なサポートもあり、皆、満足して実習を終えることができたと考える。

学習者に行った事後アンケートでも、「たくさん話すことができ良かった」「多くの先生がいて良かった」といった高評価を得ることができた。

実習全体

例年とは異なり、実習期間が春季のみに一本化され、またこれに伴って、実習参加者の数も多かったため、実習生同士の横の繋がりを、より強く意識する必要のあった教育実習だったのではないかとと思われる。

実習生の数が多いということには、「実習全体が華やかになる」「よりバラエティに富んだ授業を行うことができる」などのメリットだけでなく、「全員の都合を合わせるのが難しい」「意見に偏りが現れやすい」「引継ぎが正確になされない」などのデメリットもまた想定される。事実、本実習においても、こうした両面の影響が実習に及んでいた。とくに引継ぎなどに関わるデメリットは、特別活動の反省にもつながった点である（4.4 詳述）。

しかしながら、実習全体を通してみれば、日々切磋琢磨する中で芽生えた〈横の繋がり〉という共有意識によって、皆、高い士気を保ちながら、最後までチーム一丸となって実習を終えることができた。

本実習において我々実習生は、日本語教育の技術習得や教育理念の基盤を構築することができただけでなく、人間的成長をも遂げることができたと感じている。

(文責：高橋)